

---

# 外来語再考

山名豊美

---

## 要約

日本語の外来語は歴史的に重要な役割を担ってきた。古くは仏教伝来の頃から近くは戦後から現代に至るまで、外国で生まれた新しい文明は言葉とともに日本に紹介されてきたと考えてよい。しかしながら、明治以降の西洋文明の導入はそれまでの中国を経由して導入されたものと異なり、すべてを漢語や和語で置き換えることができない質と量を持っていた。それを解決するために我々はカタカナを使って外国語の語彙をそのまま日本語に移し替える方法を考え出した。ゴムやガラスやビールなど今日では日常的に使われている多くの語が幕末から明治にかけて日本語に取り入れられた。

しかしながら、カタカナを使って外国語を自由に日本語に取り入れることができることで、無制限に外来語が増殖し、その中には多くの人が理解できないと思われるようなものも少なからず存在する。本稿では過去から現在までの外来語の歴史を概観し、今後、我々がどのように外来語に接していくべきかを考える。

キーワード：日本語、外来語、カタカナ

## 0. はじめに

外来語の増殖が始まったのは必ずしも最近のことではない。明治の文明開化期はもとより、第2次世界大戦後の英語ブームや東京オリンピックの時代を経て、現在に至るまで外来語は常に増殖し続けてきた。しかるに我々がここ10年程の間経験している状況は過去のどの時代と比べても最も激しく外来語が増殖している時代と言ってよいように思われる。それはこれから先の日本語がどのように変化してゆくのかを左右する要因でもあり、我々一人ひとりが日本語のあるべき姿を考える上で無視することのできない重要な問題であると考えられる。

外来語を歴史的に見ると、仏教伝来の頃までさかのぼることができる。現在では漢字で書かれることが多いダルマ（達磨）やラカン（羅漢）、ケサ（袈裟）といった語も元をただせばインドからの外来語であり、現代的に表記すればカタカナで書かれるべき語であると言える。外来語の歴史については榎垣実氏の『外来語』に氏の膨大な研究がまとめられているので、そちらを参照していただくことにして、ここでは明治以降にわが国にもたらされた英語を中心とした西洋からの外来語について考えていくことにする。

## 1. これまでの状況

### (1) 明治初期～昭和20年

明治初期は文明開化の時代である。日本が開国するとともにインクやガス、コーヒー、テーブルといった西洋文明の必需品とも言える事物が日本に入り込み、それを指す言葉も必然期に入ってきたのがこの時代である。もっとも明治以前にもガラスやゴム、タバコ、ビールなどの品々が長崎に來航するオランダ人やポルトガル人によってもたらされた。(榎垣実(1975) p. 237) これらの品々はやがて日本人の生活の中に深く根をおろすようになり、それらを指す言葉もまた日本語の中に定着していったと考えられる。これらの表記にはカタカナ表記以外にも硝子や護謨、煙草、麦酒などの表記方があり、現在でも店名や社名として時々見かけることがある。しかしながら、たとえ漢字表記が使われていても麦酒はビールとしか呼ばれることはなく、「むぎしゅ」という呼び名は使われていない。他の語も同様であり、漢語による訳語が存在しない外来語の歴史がかなり長いものであるということが分かる。

後になって、グラスやラバー、シガレット、ピアなどの語が英語経由で入ってきたと思われるが、それらの語は狭い意味での使用に限られ、それまでの語を駆逐することはなかった。グラスを例にとって言えば、単独で使われる場合はウイスキーなどの洋酒を飲むための杯を意味し、複合語のスタンドグラスなどの時だけガラスの代わりにグラスという語が使われる。これはピアホールやピア樽などの複合語の時だけビールの代わりにピアという語が使われるのと同じ現象である。ピア樽に関してはビール樽という表現も可能であるが、スタンドグラスと同様に、外来語は基本的に事物とともに移入され、定着していくという原則があるらしい。

その後も海外から新しい物が紹介される毎にその物を指す言葉も同時に移入されるという現象が続いた。大正から昭和にかけてはトマトやポテト、チョコレートなどの食品が日本に入ってきた。トマトは赤ナスと呼ばれることもあったらしいが、現在ではトマトの形で定着し、ミニトマトやフルーツトマトなどの新しい品種も存在する。それにひきかえポテトの方はポテトサラダやポテトチップス、フライドポテトなどと複合語として使われることが多く、野菜としてのジャガイモやサツマイモをポテトと言うことはほとんどない。ジャガイモはジャガタライモの短縮形で、江戸時代にすでに移入されており、ポテトという外来語がそれにとってかわることはなかったと思われる。(榎垣実(1975) p. 119)

### (2) 昭和20年以降

戦争中は英米をはじめとする欧米文化が排斥され、その結果、外来語も排斥されることになった。今では冗談のように思われるが、アメリカ文化の代表のような存在である野球もアウトやセーフなどの外来語を「だめ」とか「よし」に替えて続けたという話が伝わっている。しかし、外来語の元は外国語だったかもしれないが、生活に密着して使われる中で日本語として定着していったものであり、すべてを排斥することなど戦争当時であっても無理なことであったと思われる。このことは近年になって提案されている外来語の言い換えが極めて困難な取り組みであることを示唆しているとも言える。ともあれ、敗戦を迎え、進駐軍が滞在することになった日本は文明開化期を凌ぐ勢い

でアメリカ文化の洗礼を受け、外来語の増殖という事態に見舞われたのは言うまでもない。ジープやブルドーザーなどが実物とともにこの時期に使われるようになった。しかし、この時期の最も大きな特徴は GHQ や GI, MP といった語が英語のまま使われ、人々の口にのぼったことであろう。これらの語は占領が解け、進駐軍が姿を消すとともに忘れられていった。近年になって英語の省略形である USB とか JR, IT などという語が日常的に使われるようになる土台が戦後のこの時期に形成されたとも考えられる。

外来語は基本的にカタカナで表記するという習慣が現代日本語では確立していると思われるが JR を場合によって「ジェイアール」と表記することがあるのを除けば、USB を「ユーエスビー」と書いたり、IT を「アイティー」と書いたりすることはない。USB メモリーはコンピューターの記憶媒体の一種を指すものとして多く人が普通に使用しているものであるが、我々はいつの間にか日本語の中に英語を直接取り入れてもそれほど違和感を覚えないところまで外来語の範囲を広げてしまったのである。このような現象が生じるきっかけが GHQ による戦後の占領下の環境にあったことは否定できないだろう。その後も日米は政治と経済の両面で強い結びつきを保ち現在に至っている。その結果、P3C や F15 といった航空機の名前や IBM や GM などの会社名、ICU や CT スキャンなどの病院設備等々、日常生活の様々な場面でアルファベットをそのまま使った外来語を目にするようになった。

## 2. カタカナ語の氾濫

戦後一貫して外来語の使用が増えてきたというのは多くの人々が感じている実感であると思われるが、1970年以降になって質的变化が生じてきたとする意見がある。山田 (2007) は外来語をまず 3つの類型に分類し、次のように解説している。

【第一型】＝未処理の外来語　　ユビキタス、インキュベーション、ニッチなど

【第二型】＝処理が進行中の外来語　　ガーデニング、ケア、クッキングなど

【第三型】＝処理が終了している外来語　　ラジオ、ノート、ボールなど

ご想像の通り、コミュニケーションにおいて問題を生じるのは日本語化が済んでいない外来語でなかでも第一型のものはほとんど生のまま日本語の中に投げ込まれた外国語である。私の調査では、外国語をカタカナ書きしただけで世間に投げ出す風潮が現れたのは、およそ一九七〇年代である。それは、外国映画のタイトルにおいてははっきりと観察できる。この風潮は衰えることなく今日に及んでおり、今では映画のタイトルだけでなく、ありとあらゆる外国語がカタカナ書きしただけで日本語に取り込まれている。(山田 (2007) pp. 24-25)

結論として、山田 (2007) は第一型の外来語をマスコミが濫用することで社会的なコミュニケーションの崩壊が起きていると指摘している。興味深いのはここで第一型の分類された外来語が今日ではあまり使用されなくなって、その代わりに別の新しい外来語が次々に生まれているということである。

このようなカタカナ語の氾濫とでもいうような状況に危機感を持つ人々の数は次第に多くなり、新聞の投書欄に外来語の使用を減らすべきだという意見を目にすることも少なくない。2003年には国立国語研究所によって、合計114語の外来語についての言い換え案が発表された。以下にその中の最初の10語について外来語とその言い換え例をあげてみる。

外来語	言い換え例
アーカイブ	保存記録, 記録保存館
アイデンティティー	独自性, 自己認識
アイドリングストップ	停車時エンジン停止
アウトソーシング	外部委託
アクションプログラム	実行計画
アクセス	接続, 交通手段, 参入
アジェンダ	検討課題
アセスメント	影響評価
アナリスト	分析家
アメニティー	快適環境, 快適さ

ここにあげた10語だけで結論を出すことはできないが、言い換えの試みがあまり成功していないということだけは言える。外来語を使うのにはそれなりの理由があるのであって、無目的に使っているのではない。先進性や新鮮さを表現するために外来語を使おうとしている時に、それを漢語や和語で置き換えて表現することはほとんど不可能と言ってもよい。上であげた語の意味を考えると、政治や行政に関わる人々が何か新しいことを実行しようとしたり、経済や経営について専門家が解説したりする時に意図的に外来語を使うことで言い換えでは得られない効果をねらっているような場面が思い浮かぶ。例えば、外部委託と言ってしまうと他人まかせの無責任な経営ととられかねない時にアウトソーシングという語を使うことで効率的で斬新な経営を印象づけることができるといった具合である。国立国語研究所の提案は外来語の使用を減らすという点ではほとんど効果がなかったと言ってよい。

### 3. 外来語の未来

幕末から明治維新を経て現在に至るまで外来語は西洋の新しい文明を取り入れようとする日本人にとって大変便利な道具としてなくてはならない存在になってきた。ガスやガラスはもとより、エレベーターやモノレール、ヘリコプターといった語をあらためて漢語や和語に置き換えようとする人はいないだろう。しかしながら、近年の野放図とも言える外来語の増殖には異を唱える人が多いのも事実である。トレーサビリティやコンプライアンスといった原語でも複雑な概念を説明なしにただカタカナに置き換えて使うような姿勢は、とりわけ、多くの人に説明することを使命とする政治家やマスコミには、決してとって欲しくはない。もっとも一定数の人が日常的に使用しない限り外来語として定着することはできないので一時的に話題となって使われることに対してそれほど神経質になることもない。「新しい」という意味のハイカラやモダンという語を今では誰も口にする

ことはない。その意味では外来語は流行語に似た性質を持っていて新陳代謝が激しいのである。そういう視点から最近の流行語を見てみれば、DJ ポリスやビッグデータ、NISA (ニーサ)、PM 2.5 など外来語に相当する語が次々と出てくる。

新たに登場してきた外来語の中で何が残って何が消えるかは、その時の社会状況によって決まる。物に付けられた名前であれば、その物が無くなれば名前も自然に無くなってゆく。例えば、カセットやカセットテープという語はその物が作られ、日本に導入されるとともに使われるようになった外来語であるが、何年か後にはその物が無くなり、その名を口にする人もいなくなるだろう。それがいつかは分からないが今がその途中であるということだけは分かる。それは漢語や和語で作られた名前でも同じことなのだが、あまりに多くの外来語が新たに作られる現状に多くの人が戸惑っているのではないだろうか。どんな外国語でも発音をカタカナで表記さえすればすぐに取り入れられるのは日本語の特長であるが、それにも限度はあるだろう。便利さにあぐらをかいて意味の分からない語を増やすことになっては日本語の将来のためにも決していいことではない。

#### 4. まとめ

日本語は漢字、ひらがな、カタカナの3種類の文字を組み合わせる世界でもきわめてめずらしい書記体系をもつ言語である。中でもカタカナは、個人や会社あるいは製品名などの固有名詞を含めて外来語を表記するという限定的な役割が与えられている。そのことで逆にカタカナで書きさえすれば外国の要素を付け加えることができることになる。例えば、台所をキッチン、居間をリビングルームと呼ぶことで、欧米流の洒落た生活ができるような気がするのは外来語の力であると考えられる。しかし、表音文字のカタカナには漢字のような意味を伝える力がない。アセスメントでは何のことも分からない人にも影響評価と言えば意味が伝わるのは漢字表記の利点である。カタカナ語を使うことで雰囲気は伝わっても意味が曖昧なままでは本末転倒である。江戸から明治にかけての人々が洋書の翻訳を通じて法律や科学、芸術などあらゆる分野を日本語で理解できるようにした努力を我々は忘れてはならない。

(やまな・とよみ メディア社会学科)

#### 参考文献

- 国立国語研究所「外来語」委員会 (編) (2006) 『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』 ぎょうせい
- 榎垣実 (1975) 『外来語』 講談社
- 山田雄一郎 (2005) 『外来語の社会学』 春風社
- 山田雄一郎 (2007) 「現代のコミュニケーションと外来語」『言語』第36巻6号 pp.22-29

## Borrowed Words in Japanese – Reconsideration

Toyomi Yamana

A number of borrowed words have been introduced to Japanese language since ancient times. Those were brought with ideas or items of a new civilization developed in foreign countries. Until the Edo era many of them came through China and were, therefore, described in Chinese characters. After the Meiji evolution, however, the European and American civilizations became directly introduced into Japan. Then, a number of borrowed words became described in one of the Japanese phonetic alphabet, katakana. Now we are surrounded by too many borrowed words, some of which are not familiar to most ordinary people. In this paper we consider how we should deal with those newly borrowed words through the history of borrowed words in Japanese.

Keywords: Japanese language, borrowed words, katakana